



西垣文庫  
文庫 10  
7356  
9





特 文庫10  
7356  
9

新聞第九輯

辰五月六日出板



○奥羽并野洲辺雜報

仙臺の門伊達筑前の人數官軍へ向て砲發したるとの風説世上は專らわれども全く虚説なりされども是は似寄の事なり其次弟ハ兼て別家伊達の兵士の弱兵なりと官軍ハ勿論本藩の兵士迄も此と愚弄する所と甚しかりしや大に奮激して近頃ハ會津庄内を除くの外奥羽の内伊達筑前の兵士はと強きハありといふはと盛なりたる由然し愚弄する所と尚止すべし

第九輯





バツつゝ勢ひと見せくれんと思ひ居ける内追會とて參謀方操出せしうバハ裁ガ猛威を示すハ屈竟の時ありと命令とも待たずして先進不意に横合より會兵へ砲發したる由されとも味方砲發之令未と下さる内突然と横合より打出せしより筑前兵隊ハ裏切したるならんと一時思はれたるなりされと全く勢と示さんぐ為のみして他は異心を事顕然たり恐くハ此等の事件を聞らやよりて官軍に向ひ砲發したるると世上は風説するあふんと奥州の或藩士の物語りなり

○ 先頃日光辺へ屯集したる脱兵  組下會津庄内の脱藩及当三月中江戸屋敷引拂越後の國新發田辺に屯集したる衆名の脱藩とせし五六百人斗り閏四月廿一二日の頃同國青海（あま）海岸といふ所にて官軍と戦争及より由勝敗ハ種々の説ありて未其確報を得されハ茲に記さず

○ 同月廿五六日頃日光海道大田原宿にて官軍と脱走兵の内一番傳習兵五百人と戦争ありたり此日の戦



ハ余程の苦戦にて傳習兵の働き實にめがよかり  
と云う大鳥圭介の指揮よりいふに当節ハ圭介の手  
をえられて一隊とて獨立して退く進む模様なりと  
いふ未詳なり

○

五月二日夜石州濱田の藩士江戸屋敷に住居せしもの  
九十人脱走いふせし由此兵士の何れも戦場は事なれ  
たる誠の勇士なりと其外諸藩退く脱走する者ありと  
の風説かまびすし

○

會社伏啓

第六輯に柳原殿徳川氏の運送船長鯨丸乗り玉ひて関  
四月廿二日房州より歸府いたされさるといふまことと  
載せたり然るにこの他の船に乗り給ひて歸府いとさ  
れたるにて全く長鯨丸といふされと長鯨丸も同日に  
品川沖歸帆せしや傳者の誤りにて斯に記せしなり  
然るに右船の乗組中より尤の通り其非と難して督責  
せられたりこの誠吾會社の幸慶といふべし若此責を  
うりせし謬誤を傳て人を欺くちるべし素より書載す  
るにいかるだけ確説を取らるものなれとも尋常中の傳



者の誤りなきも巧く希く四方の君子もさ  
るふとを見玉ひ、速く其非を尤の書肆につけて其謬誤  
と傳ふのそくでと負ひかぶりえんふとよつて茲に  
公然と其罪を謝して普く世の看官を告ぐ

小石川傳通院前書肆 雁金屋清吉

○  
其新聞紙社中虚誕之説尋きハ姑らく措て不論我徳川  
海軍の事と記す事往々無根之説と書載せ就中第六号  
中、徳川運送船長鯨丸事去月廿二日榊原殿并其兵隊  
と房州より品海迄乗せ来り一杯全跡方もなき空言て

拙者共し於ても甚不快し存い以后右様之虚説を妄記  
いたし以俊堅く差由中右等ハ船中一同々氣合しと  
關りり不容易俊此段吃度申入置い

徳川運送船

長鯨丸

乗組

日、新聞社中

○  
本文之文言其終直し其日、新聞へ載せ長鯨乗組中へ  
可謝妄言之罪い



三州の或る藩駿遠参、三ヶ國の由取締を命ぜり是は用  
掛の人ハもと新井の本陣の某并一且同家と脱藩し  
る山本某兩人の由

○ 羽州山形へ庄内の人數押寄たりとあり君公苗守も  
詮方なくひそりし其人數を城内へ操入せしより

○ 奥州伊達郡川俣衆折ふその外すべて是まで代官支  
配の向ハ六の度不残 天朝へ召上らせへ旨奥  
羽鎮撫総督九條殿より仰せり夫も也へ昨冬

より取立置りる年貢金等おとしく封印し右由領地と  
とも仙臺へ預けらむたりとあり川俣の代官森  
孫三郎ハ王臣となりて名目を郡司代と改免その由領  
地ハ是迄の通り支配せらむとて仰付らむとあり仍て  
其年貢金ホも自分の手許へ預り置り如何の所為な  
るや其金子大半紛失しりせハ配下の百姓とも六の事  
を聞き大に怒りりや柳なり不取締の佞奸吏ハ支配  
を受けトとして既に一揆も起らんとすとの勢なりり  
由又奥州塙たまたまの代官多田鏡三郎ハ六の度 天朝  
より支配所をハ召上げられへとの余令何かりせハ



詮方より其支配高人別并より昨年以來取立置り年貢等  
細密よりとりあはるへ官軍へ引渡り已ハ固より潔より取  
片付て近々歸府せらるるよし



